

北はりま支部

支部長 森本 恭行

Knowledge

公共施設再編に伴う 解体設計のナレッジ

地方公共団体にあっては、近年の人口減少や市民ニーズの多様化、建物の老朽化により公共施設の再編計画が進んでいます。そういった状況から公共建物の解体設計業務が発注されるようになりました。設計図書の読み取り、部材ごとの重量・体積の算出、廃材処理や再利用計画などこれまでの新築・改修設計業務とは違った内容が求められ、新しい設計の分野であると考えられています。加えて石綿含有建材(アスベスト)の推定と調査なども法令順守・適正な工事費算定の面から重要となっています。

北はりま支部では経験も豊富な特定建築物石綿含有建材調査者を講師に招き、解体設計に関する知識を高める取り組みをしています。引き続き継続していきたいと考えています。

Local activities

地域イベントを通じた 建築士の防災啓発

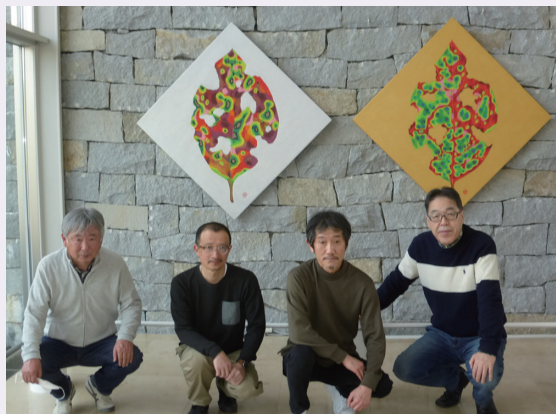
毎年北はりま支部では、展示、販売、飲食ブースなどを通して市内企業・団体や特産品等の紹介を行う「にしわか産業フェスタ」に参加し、無料建築相談や建築士事務所協会の活動紹介を行っています。

例年は木造住宅の構造モデルを展示し、住宅耐震性の大切さなどを一般の方にご理解いただける活動をしてきました。

今年は賛助会員のご協力を頂き、風水害に対する防災対策製品を展示し、自然災害に対する備えについて意識を高めていただく取り組みを行いました。

趣味から 見えるもの

- 56- 北欧研修旅行記 建築巡礼の旅
- 64- 北欧の風景 スケッチ その7
- 67- 地中海5カ国クルーズ



北欧研修旅行記

(デンマーク・スウェーデン・フィンランド)
建築巡礼の旅



(株)アーキノヴァ設計工房
代表取締役 柏本保(神戸支部)

去る2025年9月12日から9月23日までの12日間、北欧研修に行ってきました。東京で勤務している息子との“建築好き父子の珍道中”『建築巡礼の旅・第7弾』です。

こここのところ、新型コロナ禍期の2年間を除き、毎年ヨーロッパに建築研修に行っており、昨年はアメリカ研修旅行に行きましたが、今年はヨーロッパの中でも今まで訪れていなかった北欧への研修旅行といたしました。

主目的は日本においても多くの人に今も根強い人気のあるフィンランドの巨匠、アルヴァ・アアルトの名作「マイレア邸」等の建築作品見学です。

まずはデンマークに3泊。続いてスウェーデンに3泊、最後はフィンランドに3泊、9泊のスケジュールですが、時間的に可能なかぎり多くの建築家の作品、美術館および街並みを10日間で約60か所を巡る、いつものがらの過密なスケジュールです。

9月12日(金)、午前9時50分に羽田空港を出发。約13時間でフィンランド・ヘルシンキ空港に到着。そこで乗り継ぎ、約2時間でデンマーク・コペンハーゲン国際空港に午前8時に到着しました。東京出発時の最高気温は32~33°Cとまだまだ暑かったのですが、北欧のこの時期の最高気温は15~16°Cと、事前に認識していたとはいえあまり荷物を増やしたくないので、長袖の重ね着で対応するつもりでしたが、こちらへ来てみるとさすがに寒く、街を歩く人々はすでにコートを着用。セーターを持ってこなかったことを悔やみました。



左:ヘルシンキ国際空港・ムーミン像、右:コペンハーゲン中央駅



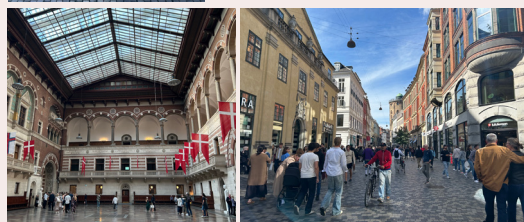
SASロイヤルホテル:
らせん階段

9月13日(土):<1日目>まずは、最初に重厚な赤レンガ造りの「コペンハーゲン中央」駅に行きました。内部空間を覆う集成材のアーチ屋根は竣工後100年を超える月日の歴史を感じさせます。次にアルネ・ヤコブセン設計の「SASロイヤルホテル」に向かいました。1960年竣工の22階建ての建物。高層建物が少ないデンマーク国内初の高層建物です。1階ロビーのエlegantならせん階段やヤコブセン自身の設計による上質な家具や照明の空間を思う存分楽しむことができました。

世界で最も古い歴史を誇る元祖「チボリ公園」は開業が1843年。コペンハーゲン中央駅のすぐ前に位置します。当日は休館でしたが、広大でバラエティー豊かな公園であることを外部から垣間見ることができました。



左:チボリ公園、右:コペンハーゲン市庁舎



左:市庁舎1階大ホール、右:ストロイエ

そこから「コペンハーゲン市庁舎」に移動しました。デンマークの伝統的な赤レンガ造りの風格ある建物には106mの塔がそびえています。内部の3層吹き抜けのホールは色々な催し物に使用される優美なホールです。市庁舎の側面には“人魚姫”、“醜いアヒルの子”、“マッチ売りの少女”等の童話で有名なアンデルセンの銅像があります。

ここから移動し、「ニュー・カール・スベア・グリプトテ

ク美術館」に行きました。

この美術館はエジプト・メソポタミア・ギリシャ・ローマの彫刻や美術品のコレクションで有名な美術館です。建物自体も美しく、内部空間は自然光を多く取り入れるよう工夫されており、パティオには緑の植物が豊かに茂る、とても心地良い空間となっています。



左上:ニュー・カール・スベア・グリプトテ美術館、
右上:パティオ、左下:
ニューハウン

その後、市庁舎広場からコンゲンスニュートー広場に繋がる複数の広場からなる歩行者空間「ストロイエ」に移動しました。多様な店舗が立ち並び、コペンハーゲンを象徴する場所となっています。そこから「ニューハウン」に向かいました。運河沿いにカラフルな建物が軒を連ね、多くの観光客でにぎわい、デンマークを代表する景観の一つに数えられる地区です。



左上:デンマーク王立プレイハウス、
右上:クロイヤー広場の集合住宅、
左下:デンマーク国立オペラハウス

運河沿いには新旧の個性的な公共建物等が立ち並び、建築好きの人々にとっては非常に魅力的な地域です。まずは運河沿いに建つ王立劇場「デンマーク王立プレイハウス」を訪れました。水上に張り出すガラスのボックスにホワイエやカフェ、その背後に劇場が配置され、多目的複合施設となっています。その対岸には、「クロイ

ヤー広場の集合住宅」があります。四角い建物の屋根を斜めに数か所スライスしたような煉瓦の外壁が特徴的な集合住宅。近隣にもデザイン性に優れた集合住宅や商業建築満載で、いずれの建物も自己主張しつつ、運河沿いの景観にマッチしています。



上:デンマーク王立図書館新館、
左下:ヴェスター・ヴォルゲート通り、
右下:デンマーク建築センター

「デンマーク国立オペラハウス」は優雅でシャープなデザインの内港に浮かぶように建つ建物。大劇場と小劇場2つを有し、大劇場を包み込む局面ガラスによる5層吹き抜けの半円形のホワイエは迫力がありません。

次の見学地は、やはり運河沿いの「デンマーク王立図書館新館」です。道路を挟み、連結された旧館と新館からなる図書館です。外壁に黒花崗岩が使用された新館はブラックダイヤモンドと呼ばれています。巨大な吹き抜け空間は、低層部はエスカレーターで上部へと繋がっていますが、図書室ゾーンはその大空間部に面しておらず、その空間がこの施設の利用者の本来の人が集う目的に生かし切れていない印象で、少し残念な思いがしました。

最後に「旧王立劇場」で事前に予約した午後8時開演の優雅なバレエを鑑賞して、1日目の研修を終えました。

9月14日(日):<2日目>まずは、「ジャマンズ広場」から内港へと続く広い歩道の「ヴェスター・ヴォルゲート通り」を通過し、「デンマーク建築センター」に向かいました。白とグリーンを基調とする7つのボックスが千鳥状に配置された建物は、広場、公園、大階段の3種類の空間が創出されています。設計はオランダの組織事務所OMA。

ここに到着したとき、「コペンハーゲン市民ハーフマラソン」の先頭集団が走ってきました。建物の前面道路がマ

ラソンコースになっており、選手が次から次へと走って来るため、なかなか道路を横断できずしばらく待たなければならぬ状況で、私も側道を思わず走ってみました。



左上:コペンハーゲンハーフ市民マラソン、右上・左下:オー・ドロップ・ゴー美術館、右下:フィン・ユール自邸

次にザハ・ハデイド設計の「オー・ドロップ・ゴー美術館」に向かいました。この美術館は建築家であり、家具デザイナーでも有名なフィン・ユールが建てた木造の旧館に併設され、ザハ・ハデイド特有の流れるような曲線を描く打ち放しコンクリート造りの新館が増設され、異彩を放っています。対比的な新旧の建物が豊かな自然環境の中でうまく調和しています。

新館は、地上に出ている部分はコンパクトな建物のように見えますが、地下に広い展示室が広がっており、数多くの作品が展示されています。同敷地内にある「フィン・ユール自邸」では、自身が設計し愛用した家具や照明器具が当時のままおかれ、自然・建築・インテリアが融合する豊かな空間を体感できました。

次に少し郊外に移動。閑静な住宅街を徒歩で通り抜け、「ルイジアナ美術館」に行きました。

対岸にスウェーデンを望む景勝地に建つ「世界一美しい美術館」ともいわれる名建築。増築を重ねた建物は、古い邸宅を本館として広大な庭を周遊するように各棟が平屋の回廊で結ばれ、さらに広がった地下で繋がり、作品と建物内外が調和した展示空間が展開しています。最後に海を見ながら併設のレストランで飲むビールは格別な味わいでした。



左上:ルイジアナ美術館正面、右上:海を臨む屋外展示、左下:回廊内部展示、右下:屋内展示

9月15日(月):〈3日目〉コペンハーゲン最後の研修です。最初にジャン・ヌーヴェル設計の「DRコンサートホール」に行きました。デンマーク放送協会所有のコンサートホール。大ホールと3つの小ホールで構成されています。ブルーのメッシュシートで覆われた外観は、工事中のような印象で平凡な感じが否めません。ただ、夜になると建物を覆うシートに映像が投影され、日中とは大きく異なる表情を見せるようです。

次に「ITユニバーシティ」に移動しました。都心に位置しキャンパスのない大学で、並列する2棟の直方体の校舎が5層吹き抜けのアトリウムで結合した構成の建物。ファサードはオーソドックスなカーテンウォールですが、中へ入ると状況は一転。両サイドの校舎から飛び出す箱型の付属室が光あふれるアトリウムに立体感を生み、圧巻の空間を生み出しています。このような環境で学ぶ学生は、培った想像力を発揮し才能豊かな人物になるであろうという思いがしました。

それからすぐ近くにある「テイトゲン学生寮」に移りました。大きな中庭を円環状に取り込むドーナツ型平面の学生寮。共用部が中庭にせり出し、入居者の活動が中庭を介して共有されています。個性的な専有部が外部へ開かれ、学生寮としては日本ではとても考えられないほど贅沢でかつ、インパクトのある造形の建物です。



左:DRコンサートホール、右:ITユニバーシティ



左:テイトゲン学生寮、右:内部側

そこからコペンハーゲン中心部に戻り、アルネ・ヤコブセンの遺作「デンマーク銀行」に向かいましたが、残念ながら改修工事中でした。外観は大理石とガラスの縦のスリット窓のラインが協調させたデザインです。内部のエントランスではスリットから差し込む光とワイヤーで吊られた階段が見る者を圧倒するようですが、内部を見ることは叶いませんでした。



左上:デンマーク国立銀行(改修中)、右上:救世主教会、左下:ローゼンボー離宮、右下:ローゼンボー公園

次に「救世主教会」に移動しました。1696年に建てられたらせん状の階段を持つバロック様式の教会です。高さ約90mあり、内部階段から外部のらせん階段へつ繋がり、尖塔上部からおもちゃみたいにきれいな街並みが一望できます。

そこから、本日最後の研修地である「ローゼンボー離宮」に行きました。この離宮は、クリスチャン4世により建てられたオランダルネッサンス様式の建物で、1634年に完成しました。外観のみ見学し、手前にある「ローゼンボー公園」で一休み。デンマーク3日目の研修を終えました。

9月16日(火):〈4日目〉早朝10時にコペンハーゲンを出発し、スウェーデンに向かい、11時過ぎにストックホルム・

アーランダ空港に到着しました。

ストックホルム初日、最初にノーベル賞受賞会場である「ストックホルムコンサートホール」に向かいましたが、残念ながら改修工事中であり、全面シート張りですべて建物の見ることができませんでした。

宿泊ホテル近くの「クンスガータン地区」は「王の通り」という名の市内中心部を東西に走る大通り。「マルムシェルナ橋」や「王の塔」、上に行くほど狭くなる「マルムシェルナ階段」など興味深い都市要素が点在しています。次に南北の通りを歩き「ガムラストン」方向に向かいました。

「ガムラストン」は旧市街地で、宮殿や大聖堂をはじめとする歴史的な建造物、街中に張り巡らされた石畳の路地があり、観光地としても有名な場所です。

まずは新市街地のランドマークともいえる「セルゲル広場」を通過し、そこから離れ島に向かいます。橋を渡るとすぐに「国会議事堂」があります。半円形と矩形の2つの棟で構成された建物です。保存か取り壊しかで論議され、結局隣接するスウェーデン銀行を取り込むように増築されました。

次に「ストックホルム近代美術館」に移動しました。ラファエル・モネオの設計です。頂部にトップライトを持つ矩形平面の展示空間が水平方向に連続する建物構成です。展示物は現代美術が中心であり難解でしたが、美術館には珍しく建築展が開催されており少し癒されました。

その後、夜の「ガムラストン地区」を散策し、夜の情緒ある風景をたっぷり楽しみました。



左上:クンスガータン、右上:国会議事堂、左下・右下:ストックホルム近代美術館・建築展

9月17日(水):〈5日目〉ストックホルム2日目、最初の見

学は「聖マルクス教会」です。明日見学予定をしている「森の墓地」の一連の作品である設計者の一人シーグルト・レヴェレンツの作品です。薄茶色の焼き煉瓦による落ち着いた外観が白樺の森に溶け込む教会。第1回目スウェーデン建築賞を受賞した作品で、同じ素材で構成された薄暗い礼拝堂の天井は左右の中と高さを互い違いに変えたヴォールトの天井が祭壇に向かって波打っており、ゴージャスな飾りはなく、むしろシンプルな空間ですが厳かな雰囲気醸し出しています。

次に向かったのは、午後12時からの英語ガイド付きツアーを予約していた「ストックホルム市庁舎」。設計者はラグナル・エストベリ。村野藤吾が当地を訪れ絶賛した建物です。メーラレン湖畔に建つ優美な市庁舎で、ハイサイドライトからの光が降り注ぐ“青の間”、壁や天井が金色の装飾で覆われた“金の間”、吹き抜け天井が美しい議場等多様で上質な空間が随所に広がり、しばらくの間ゴージャスな雰囲気を満喫しました。

ちなみに、1階の“青の間”は毎年12月にノーベル賞受賞式後の祝後、晩さん会が開かれる場所として有名です。



左上:聖マルクス教会、右上:内部、左下:ストックホルム市庁舎、右下:金の間

その後、再度「ガムラスタン」に移動し、諸建物を見学しました。まずは、「リッターホルム教会」。13世紀に建てられたフランチェスコ会修道院を改築した建物で、美しい尖塔が印象的な外観には異なる様式が混在しています。一部外壁改修中でした。続いて「ストックホルム大聖堂」に向かいました。歴代国王の戴冠式が行われるストックホルム最古の教会であり、1742年にバロック様式に改修された桃色の外壁と緑の屋根が特徴的です。

そこから「ガムラスタン」の中心地「ストールトルゲット広場」に移動しました。

市内最古の広場であり、周囲には16～18世紀に建てられた住宅が数多く残り、特に西側のユニークな破風を持つカラフルな建物はこの地区一番の名所です。次は「ドイツ教会」。14世紀に建てられましたが、何度も改築され現在の姿になったのは1887年。ひととき突き出た目立つ尖塔は高さが90mあります。

本日最後の見学地は「ストックホルム宮殿」。3階建てのイタリア・バロック様式の重厚な外観で、ガムラスタンの北側にあり、ストックホルムで最も大きな建物です。残念ながら、内部閉館時間の間際で内部に入ることが叶いませんでした。



左上:ストールトルゲット広場、右上:ストックホルム宮殿、左下:ストックホルム大聖堂、右下:ドイツ教会

9月18日(木):〈6日目〉ストックホルム最後の日、まずは「森の墓地」研修です。郊外へ移動し、エリック・グンナール・アルブルント&シーグルト・レヴェレンツ設計の「森の墓地・森の火葬場・森の礼拝堂」の一連の施設を見学しました。

「森の火葬場」は広大な敷地にあり、ユネスコ世界遺産にも登録されています。

施設全体のコンセプトは、スウェーデンの死生観が取り入れられており“死者は森に帰る”。緩やかな丘の頂上にシンボルとして十字架が立つ「森の火葬場」、森林の中には10万ともいわれる墓石が立ち並び、スウェーデンの農家や教会のイメージが重ね合わされた「森の礼拝堂」、さらに敷地の奥にある一風変わった味わい深い「復活の礼拝堂」等が点在しており、建物を配列する軸線の取り方が絶妙。敷地の形状や敷地環境を巧みに融合させています。

残念ながら、「森の火葬場」の主な施設が改装中で内部空間の見学ができませんでした。

そこから、市内に戻り「スウェーデン国立図書館」に移動しました。市内中心部にある古典主義の様式の図書館。竣工当時新素材だった鉄骨を用いて建設され、内部は鉄骨むき出しですが、天井の高い閲覧室は高貴さが漂っています。続いて、「スウェーデン国立美術館」に移動しました。1866年竣工のやはり古典主義様式の美術館。エントランスから延びる階段と吹き抜けのホールはさすがに迫力があります。絵画も充実していると聞いており期待していたのですが、当日展示は思ったより有名な画家の作品が少ない印象でした。



左上:森の火葬場、右上:森の墓地、左下:復活の礼拝堂、右下:森の礼拝堂



左上:スウェーデン国立図書館、右上:ガラスボックス、左下:スウェーデン国立美術館、右下:モネ

9月19日(金):〈7日目〉早朝アランダ空港を出発して、1時間少々でフィンランドヘルシンキ・ヴァンダー国際空港

に到着しました。

フィンランド初日、まずは、「カンピ礼拝堂」に行きました。市の中心地「ラシバラツィ広場」にあり、コンパクトな個性的な外観を持つ礼拝堂。卵型をした堂内では、集成材の壁面にトップライトからの自然光が伝い落ち、味わい深い礼拝堂です。

次は「テンペンテリアウキオ教会」。設計はテュモ&トオオモ・スオマライネン。

戦前、違うデザインで造ることが決まっていたのですが、後にデザインコンペにより花崗岩をくり抜いた半地下の斬新なデザインが採用されました。コンクリートリブとガラスによる環状のトップライトからやさしい光が差し込み、岩石の壁面が異質さを感じさせず見事に調和しており、心がやすらぐ空間となっています。

そこから「ヘルシンキ大聖堂」に向かいました。ヘルシンキの都市計画を任されたドイツの建築家エンゲルが手掛けた白亜の大聖堂。ドームを軸としたシャープなデザインが印象的です。次にすぐ近くの「ヘルシンキ大学図書館」に移動しました。市の中央部に建つフィンランド最大の大学図書館。格子状の小窓と逆アーチのユニークファサードは、連続する建物群の中で異彩を放っています。内部中央の楕円形のダイナミックな吹き抜け空間が各階を貫き、それを取り囲むように各階様々なスタイルの閲覧スペースがあり、施設使用者に配慮されたとても居心地の良い良質な空間となっています。



左上:カンピ礼拝堂、右上・左下:テンペンテリアウキオ教会、右下:ヘルシンキ大聖堂

そこから、街一番の繁華街「エスプラナーディ地区」に移動し、市民の憩いの場「エスプラナーディ公園」を歩き

ました。公園を挟んで延びる通りは、高級店が軒を連ねるヘルシンキ随一のショッピングエリア。アルヴァ・アールトが内装を手掛けた「サヴォイ・レストラン」、「ラウタ・タロ」、「アカデミア書店」もこの地区にあります。

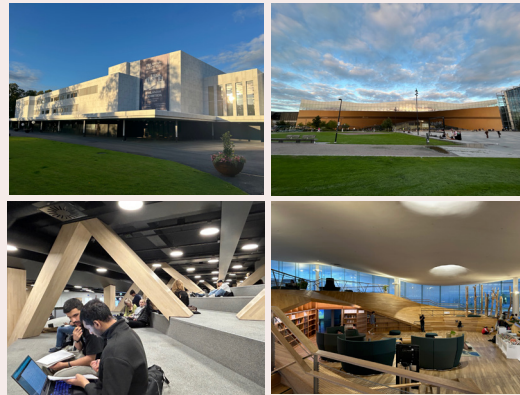
「アカデミア書店」の3層吹き抜けの店舗内は、大理石で覆われた空間が広がり、天井に設置された3つのクリスタル・スカイライトから柔らかな光りが差し込みます。好天の日が少ない北欧でアールトが好んで用いた手法です。



左上: エスプラナーディ公園、右上: ヘルシンキ大学図書館、左下: 吹き抜け部、右下: アカデミア書店

そこから移動し、アルヴァ・アールト設計の「フィンランディア・ホール」に行きました。

ヘルシンキ中央駅裏のテレー湾に面して建つフィンランドを代表する建物の一つです。コンサートホールと会議場のある複合施設。周囲の林立する白樺と水辺の景色に映える、大理石で覆われた白い彫刻的建物で、メイン道路側と海側では違った表情を見せる外観となっています。そこから今日最後の見学地とした「ヘルシンキ中央図書館」“愛称・オオディ”に向かいました。設計はALA建築事務所。有機的にうねる外観のプロポーションが秀逸です。1階は通り抜けるオープンなスペースで、2階はベレース構造体をデザインしたユニークなワークスペース等のサービス空間。3階の閲覧室では、局面天井にシンボリックなトップライトが光り、年齢層が違う人々が自由に行き来できる、段差のある自由空間の開放的な閲覧室は見事です。今回3か国で様々な図書館を見学しましたが、一番見応えがありフィンランドの建築家の実力を思い知らされました。



左上: フィンランディア・ホール、右上: ヘルシンキ中央図書館、左下: 内部空間・2F、右下: 内部空間・3F

9月20日(土):〈8日目〉いよいよ今回の研修旅行のメインイベント、アルヴァ・アールト(1898~1976)設計の「マイレア邸」。丸一日かけての見学ツアーです。ヘルシンキからはかなり遠いノールマルックの街の山中にあり、事前に行き帰りの交通機関および現地英語ガイドツアー参加を予約しておきました。午前8時にヘルシンキを出発。長距離バスで約4時間かけ、最寄り駅であるボリ駅まで移動。そこから予約したタクシーで現地に向かいました。当日午後2時に予約した約1時間のガイドツアーでは、15、6名の見学者の内、長距離バスで知り合った岡山県の大学の先生と生徒の4名グループ、関東の大学生の男性1名、名古屋の設計事務所勤務の女性1名と我々2名、なんと8名の日本人がこの時間帯の見学者でした。特にアールトの作品を見るために一人きりで北欧に旅する若者達には敬意を表したい思いがしました。



左上: マイレア邸・テラス、右上: ファサード、左下: 中庭、右下: 玄関

「マイレア邸」は、松の木立に佇むアールト住宅の最高傑作といわれる名作住宅。中庭をL字に囲む母屋と離れのサ

ウナ風呂の平面構成で、家具会社夫妻の週末住宅です。外観は白い壁に木がバランス良く組み合わせられており、玄関のキャノピーを支える柱が周囲の松林との連続性を感じさせます。

内部は様々な素材を適材適所で組み合わせ、木の円柱が居間空間にバランス良く林立し、森の多様性を表現しており、日本建築の雰囲気も感じさせられる陽光たっぷりのウインターガーデンをはじめ、家具や照明と共にトータルデザインされ、上質な空間を生み出しています。また外部庭園には有機的な形のプールがサウナ風呂から直接行ける場所に配置されています。なお、この住宅は、現在“マイレア財団”の所有となっています。

帰りは午後4時頃ボリ駅を出発し、午後7時40頃ヘルシンキ中央駅に到着しました。トータル約12時間の長旅でしたが、疲れを感じない満足感のある一日でした。

9月21日(日):〈9日目〉まずは国会議事堂に行きました。ヘルシンキ中央部を縦断するマンネルヘイミン通りに面した外観は、14本の列柱が並び、ギリシャ建築を彷彿させます。ここで、先日ツアーでご一緒した岡山県の大学の4人グループに偶然お逢いしました。これも縁と、我々二人とお互い記念撮影いたしました。ここでお別れし、「キアズマ現代美術館」に行きました。設計はスティーブンホール。緩やかなカーブと素材の使い方が特徴的な外観で、建物の縦の軸線を少しずらせた設計手法が特徴的です。

中央のアトリウムの周囲に湾曲した4つのギャラリーが配置されています。各ギャラリーで光の取り込み方に工夫が見られ、移動と共に変化する光と空間を体感できます。



左上: 国会議事堂、右上: キアズマ現代美術館、左下: アールト自邸、右下: アールトアトリエ

そこからトラムでムンキニエミに移動し、午後1時からと2時30分から予約した「アールトハウス」および「アールトス

スタジオ」の英語ガイドツアーに参加しました。

「アールト自邸」は水辺に近い高台の住宅街にあり、元々アトリエ兼住宅の建物。「マイレア邸」に比べると建築家の自邸としてはかなりコンパクトなイメージ。外観は白いスタック塗の煉瓦と黒く塗られた木製の羽目板で構成されています。

室内は意外と素朴な感じで、西側に2層分の高さを持つアトリエがあり、引き戸を介してリビングに繋がっています。アトリエ内部には本人が使用していた製図板がそのままの形で残されており、三角定規、三角スケール等が当時のままで保存されています。

ちなみに私は今でも自宅の書斎では基本計画用に、木製の製図板と木製のT・定規、三角定規を使用しており、偉大な建築家の初期のアトリエでの仕事場を目の当たりにし、感慨深い思いで、そこに腰をおろし、今回の研修旅行で一番幸せな時間を過ごしました。

続いて訪れた「アールトスタジオ」は自邸が手狭になり、近くに建てたスタジオです。

円弧状のスタジオとドローイング室などがL型配置されています。異なる素材を用いつつ、白に統一されたスタジオハイサイドライトから差し込む光が、内部をやさしく照らしています。片流れの屋根、扇形の中庭等彼のデザイン手法がいっぱい詰まった建物です。現在は“アールト財団”が保有しています。

翌日は私の誕生日。ただし翌日は帰国日なので、このところ毎年恒例となっている海外での私の“誕生日会”を一日早く行いました。



左上: アールトスタジオ、右上: 内部空間、下: オタニエミ礼拝堂

9月22日(月)・(10日目)いよいよ今回の研修旅行の最終日になりました。

帰国に向け、ヘルシンキ・ヴァンダー空港の出発時間が午後6時30分であり、時間的余裕があるため、最初に「オタニエミ礼拝堂」を訪れました。この礼拝堂は“屋外の十字架”を拝壇正面のガラスを通して室内から仰ぐ礼拝堂。煉瓦造りの壁面に片流れ屋根の構成。木造の美しい天井の架構とそれに組み込まれた照明等が美しい空間との予備知識がありましたが、建物全体が改修工事中で、建物内に入ることが叶いませんでした。ちなみにこの礼拝堂の“屋外の十字架”を安藤忠雄氏が「水の教会」において十字架の発想の参考にしたそうです。



左上:誕生日、右上:アアルト大学本館、下:アアルト図書館・ゆとり空間

次に「アアルト大学キャンパス」に行きました。広大なキャンパスの全体計画をはじめ、本館、図書館等アアルトが設計した建物が数多く残っています。特に扇形平面と階段状の造形的にユニークな外観を持つ本館の大会議室は、キャンパスのシンボルとなっています。当初は“ヘルシンキ工科大学”と呼ばれていましたが、2010年の組織改革で「アアルト大学」と呼ばれるようになりました。

大学の最寄り駅“アアルト・イリオピス駅”(アアルト大学駅)をはじめ、町中至る所の建物がアアルト大学のデザインを踏襲しています。

続いてキャンパス内の「アアルト大学図書館」に行きました。閲覧室上部にはゾーン別にハイサイドライト、スカイライト等の様々なスタイルの自然採光の工夫がなされ、穏やかな自然光が降り注ぎます。また、アアルトらしい様々な照明器具が閲覧室にやすらぎを与えています。また、壁面を丸く削り貫くような空間で、くつろぎながら本を読むことの

できる閲覧コーナー等遊び心も満載です。

最終日の研修を予定どおりに終え、午後6時30分にヘルシンキ・ヴァンダー空港を出発し翌日9月23日、無事羽田空港に到着しました。いつもながらのハードスケジュールですが、『日照時間が極めて少ない北欧で、巧みに光を建物に取り込む工夫をした北欧ならではの様々な建物』を堪能し、例年にも増して有意義な研修旅行となりました。

北欧の風景 スケッチ その7

(デンマーク・スウェーデン・フィンランド編)



◆No.168「ニューハウン」(デンマーク・コペンハーゲン)
運河沿いにカラフルな建物が軒を連ね、多くの観光客でにぎわっているデンマークを代表する景観に数えられる地区。かつては長い航海を終えた船乗り達が羽を伸ばす居酒屋でにぎわっていた場所。



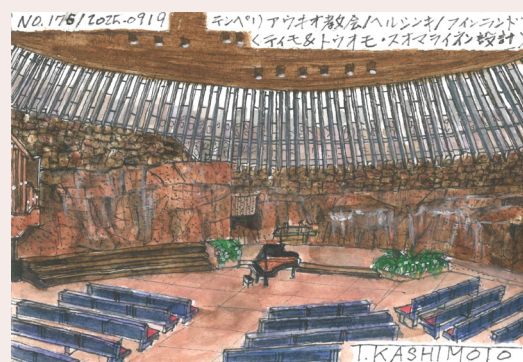
◆No.169「オードロップゴー美術館」(デンマーク・コペンハーゲン)
既設美術館(フィンユール設計)の増築建物。ザハ・ハディド特有の流れるような曲線を描く打ち放しコンクリートの新館は軍艦を思わせる造形の建物であり、異彩を放っています。



◆No.172「ストックホルム市庁舎」(スウェーデン・ストックホルム)
メーラソン湖畔に建つ優美な庁舎。ハイサイドライトから光の降り注ぐ“青の間”、壁や天井が金色に輝く“金の間”吹き抜け天井が美しい“議場”等多様で上質な空間が随所に見られます。村野藤吾も絶賛した建物。



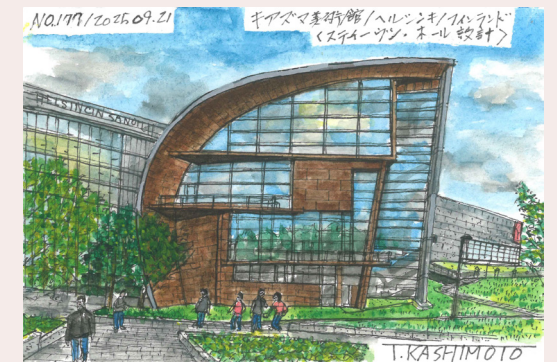
◆No.173「マイレア邸」(フィンランド)
アルヴァ・アアルトの住宅の最高傑作と言われる名作住宅。松の木の木立に取り囲まれ、中庭をL字に囲むサウナ室と母屋の平面構成です。外観は白い壁に木がバランス良く組み合わせられており、室内も様々な素材が組み合わせられて統一感があり、内外のトータルデザインが秀逸です。



◆No.176「テンベンテリアウキオ教会」(フィンランド・ヘルシンキ)
元々違うデザインで建てる事が決まっていたのですが、デザインコンペにより花崗岩をくり抜いた半地下の斬新なデザインが採用されました。岩石の壁面が異質さを感じさせず、見事に調和しており、厳かな雰囲気を醸し出しています。



◆No.170「ローゼンボー離宮」(デンマーク・コペンハーゲン)
クリスチャン4世により建てられたオランダルネッサンス様式の建物。1634年の竣工。当時絶世の美女と言われた女性と結婚して住むために作られた、おとぎ話に出てくるような外観。



◆No.177「キアズマ美術館」〈フィンランド・ヘルシンキ〉
ステープンホルの設計で、緩やかなカーブと素材の使い方が特徴的な外観です。建物の縦の軸線を少しずらせたデザイン手法が特徴的な建物。内部の各ゾーンの光の取り込み方にも随所に工夫が見られます。



◆No.171「ガムラスタンの帆船」〈スウェーデン・ストックホルム〉
ガムラスタンは旧市街地で、宮殿や大聖堂をはじめとする歴史的な建造物が数多くあります。市内の中心地「ストールトゲット広場」界隈は16、7世紀に建てられた多くの建物があります。街の海岸沿いに停泊して帆船がとても風景にマッチしています。

◆No.174「チボリ公園」〈デンマーク・コペンハーゲン〉
世界で最も歴史を誇る公園。開業は1843年。広大で、バラエティー豊かな施設です。乗り物の他、コンサートホールなどエンターテインメント施設も備わっている。ウォルト・ディズニーも参考にした公園。

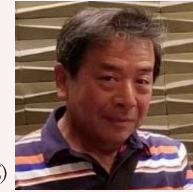
◆No.175「ストールトゲット広場」〈スウェーデン・ストックホルム〉
王宮や大聖堂などストックホルムの歴史的な史跡のほとんどがこの地区に集中しています。「ストールトゲット広場」はその中の中心的広場であり、ユニークな派風を持つカラフルな建物はこの地区一番の名所です。



エミレーツ航空エアバスA380に乗って(ドバイ経由)

地中海5カ国クルーズ 11日間、行ってきました!

(ニース、ジェノバ、カプリ島、
シチリア島、マルタ、バルセロナ)



(有)未来工房

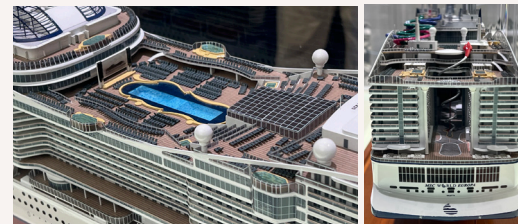
代表取締役 小村 敏夫(明石支部)

最近、神戸港に大型クルーズ船が停泊しているのをよく見かけます。神戸市港湾局によると2025年12月27日現在、1年間の入港数が142隻目と過去最多を更新したそうです。

入港を知ると、ポートターミナルに立ち寄り、錨を下し停泊しているクルーズ船を首が痛くなるまで眺めたものです。ガラスバルコニーの手摺に両腕をかけ神戸港を見下ろしている乗客の半ズボンの姿からは、遠い母国を離れた解放感に満ち溢れていました。「いつかは、あんな船に乗ってみたいなあ」と帰路に思えがいたのは、数え切れません。今回、勇気を出してやっと実現してきました!

昼は、世界遺産観光(5箇所)夜はナイトショー巡り、豪華レストランは食べ放題!バーではビール、ワイン飲み放題!プールサイド50センチ隣は水着姿のパリジェンヌ!

追加料金一切なしの日本においては絶対、体験できない異次元、非日常クルーズ11日間を紹介させていただきます。

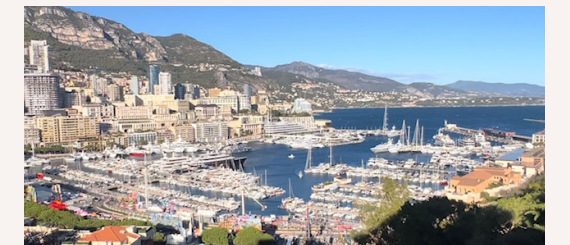


MSC ワールドエウロパの模型

1日目(関空からエミレーツ航空にてドバイ乗継ぎフランス、ニースへ)。関西空港からドバイまでは約11時間のフライトで、エコノミークラスの予定で覚悟はきめていたのですが搭乗手続きの際、プレミアムエコノミーに空きがありツアーチケットでも当日変更できる事を知りアップグレードしてしまいました。

エミレーツ航空のプレミアムエコノミーは、2024年9月から導入されテレビCMでもよく流れてきましたが、木目インテリアも座席モニターも料理も凄く良かったです。ラッキーでした。エアバスA380は超大型総2階建ての4発エンジン機で251機も製造され内、エミレーツ航空が半数以上123機、保有しており1機あたり500億円もするそうです。兵庫県庁舎の新築建替え工事費が610億円の予算ですから、アラブ首長国連邦のエミレーツ航空は、お金持ちですね。

ドバイからニースまでの機体も同じくエアバスA380でゆっくりできました。



左上:クルーズルート、右上:エアバスA380、中央左:機内(プレミアムエコノミー)、中央右:部屋(バルコニー付)、下:モナコ

2日目(ニース・コート・ダジュール空港着後、モナコへ)。ニースの海岸沿いの遊歩道と市場を歩いていると、長時間の飛行機疲れも忘れ、すっかりリゾート気分になってしまいました。日本を出発するときは、クルーズ船のプールで泳ぐことは、恥ずかしくて考えもしなかったのですが、ここニースで思わず水着を買ってしまいました。

3日目(ニースからマルセイユの港へ204kmバス移動、乗船)。バスが高台のハイウエーから海に向かって下ってくると港から突然白い巨体が4隻も目に飛び込んできました。

ガイドさんのアナウンス前でしたがそこがマルセイユ港だと疑う余地なく理解出来ました。神戸港ですら滅多に見れない巨大クルーズ船が4隻も錨を下していました。さすがフランス最大の港。それぞれの煙突から微かな煙が、風の無い空にまっすぐに漂っている姿が生き物の様です。

その中でもこれから乗船する「MSCワールドエウロパ」は、2022年に就航したばかり総トン数205,700トン、乗客定員6,762人、全長333mもあるMSCクルーズ最大級の超大型客船で、ひととき目立っていました。

乗船して驚いたのは、エレベータの形式です。エレベータフロアが船内前後2か所あって各フロアにAからIまで9基の表示がありタッチパネルで行きたい階を押すと乗るべきエレベータが瞬時に表示されてその前で待つという行先階予約システムで内部は、下りられる階だけがデジタル表示される優れものです。

22階建ての高層フロアですが、乗り降りの移動は、とてもスムーズでした。



左上:マルセイユ港、右上・下:MSC ワールドエウロパ

4日目(ジェノバに入港、世界遺産「チンクエ・テッレ」観光)。ローカル列車に乗り換えてチンクエ・テッレの村々の観光です。急斜面の岩盤の土地に11世紀に5つの村が要塞都市として建設され、以後1000年にわたって隣の村との往来は船だけで行われ、陸の孤島として独自の文化が生まれ、世界遺産に登録されました。駅も村も急斜面海岸線ギリギリに建設され当時の難工事が如実に伝わってきます。岩盤に張り付いた様な建物はそれぞれ個性豊かにカラフルに着色され、真っ黒な夜でも自宅を間違えることはないようです。



左:チンクエッレの村、右上:マナローラ駅(列車は日立製)、右下:ナポリ港にて

5日目(ナポリに入港、高速船にてカプリ島観光)。ナポリ湾に浮かぶカプリ島はイタリア屈指の別荘地で「青の洞窟」で有名ですが、今回はリゾート地のカプリ地区と昔の面影を残すアナカプリ地区を観光しました。港から乗車定員20人位の小型バスに乗り換えて、弾劾絶壁の急カーブ、狭い山道を走ること15分、見晴らしのいい高台のアナカプリ地区に到着です。教会、レストラン、お土産屋などが並んだ昔からの遊歩道を歩いているだけでも時間を忘れます。ジュエリーを散りばめたキラキラデザインのカプリウォッチも、ここが発祥です。

6日目(シチリア島メッシーナに入港、「タオルミーナ」観光)。紀元前3世紀にギリシャ人がすり鉢状の岩盤を利用して建設しローマ時代に円形闘技場として改築されたギリシャ劇場からはイオニア海とエトナ山の壮大な絶景が広がり、今でもオペラやコンサートも開催されています。周辺に世界遺産の古代ギリシャ遺跡が現在にまで点在している風情が落ち着きを感じさせます。唐辛子とかレモンの粒子が入ったザクザクした食感のモディカチョコレートをお土産に買いました。



左上:カリブ島の小型バス、左下:マルタ共和国 ヴアレッタ入港 右:タオルミーナ ギリシャ劇場

7日目(マルタ共和国の首都、世界遺産「ヴァレッタ」に入港、観光)。去年の大阪万博の時、マルタバピリオンで炎天下で生まれて初めて飲んだ「マルタビール」の味が忘れられなくてももう一度!の思いで楽しみにしていた国です。地中海の中央部、シチリア島とアフリカ大陸の間に浮か

ぶ5つの島々からなるマルタ共和国。その首都ヴァレッタは、「マルタストーン」とも呼ばれる蜂蜜色の石灰岩で造られた建築物が建ち並び、「ガラリア」という突き出たバルコニーが特徴の家々が建ち並びます。このヴァレッタは、「ルネッサンスの理想都市」といわれ、街全体が世界遺産に登録されている美しくも堅固な要塞都市です。

日の出直後の赤い太陽のまぶしい光を浴びながら朝食を食べてた時、船窓の景色が青い海から突如として、その蜂蜜色のルネッサンス建物に変わりました。



左:聖ヨハネ大聖堂(マルタ)、右上:マルタビール、右下:世界遺産 ヴアレッタ

今回の旅行のハイライト、いよいよ「ヴァレッタ」に入港です!要塞都市ですから敵から守る為、砲台、監視所など全てが海側に向いて設置されており当然、海からしか見えない!クルーズ船からしか見えない醍醐味!威圧感あふれたその堅牢な街並みが入港とともにさらに大きく、堂々と迫ってくるシーンは感無量です。20万トンを超える超大型船が16世紀にタイムスリップして入港している気分になりました。

遡ること16世紀、マルタ島はイスラムからヨーロッパを守る砦でした。そのマルタ島に1565年、イスラムの大国・オスマン帝国が5万の大軍を率いて押し寄せました。後に「グレートシージ(大包圍)」と呼ばれる戦いです。守るは9千の聖ヨハネ騎士団。激戦の末に島を守り抜いた騎士団には、ヨーロッパ中から莫大な寄付が集まり、騎士団長はより堅固な要塞都市の建設に着手しました。街の周囲には深い堀が掘られ、大砲の砲弾に耐える分厚い土塁が築かれ、道路は騎士たちが直ちに沿岸に駆けつけられるよう碁盤の目状に整備されたのです。そして、騎士団長ジャン・パリゾ・ド・ラ・ヴァレットの名にちなみ、街はヴァレッタと命名されました。この街の中心に建つ聖ヨハネ大聖堂に入ると、色とりどりの大理石が床一面に敷き詰められています。それは400にも及ぶ騎士たちの墓碑であり、ヨーロッパを守るために奮闘した、騎士

団の栄光のモニュメントなのです。

大阪万博の時は知らなかったそのような歴史を、16世紀の建設当時の姿を今にとどめる世界遺産城塞都市ヴァレッタの街中の路上レストランで「マルタビール」が再びのどごしを通りました。日々戦いに明け暮れた聖ヨハネ騎士団の勇姿、そして彼らを支えた島民たちの暮らしを想像しながらの味は、さらに深みが増したようです。



左上:ヴァレッタの砲台、左下:サンパウ病院、右:サグラダファミリアの模型(クリーム色の部分が未完成)

8日目(終日バルセロナに向かって地中海クルージング)。終日クルーズの前夜は(ヴァレッタ出港後から)船内にドレスコード「フォーマル」が適用されます。ワールドエウロパのドレスコードは、日中はカジュアルでOKですが、夕方以降は船内新聞で指定される「フォーマル」「ホワイトナイト」などがあり、これに合わせておしゃれな服装(女性はドレス/華やかな服、男性はジャケット/スーツ、蝶ネクタイなど)を準備する必要があります。Tシャツや短パンはレストランで避け、寄港地観光はカジュアルで問題ありません。スーツケースに入れてた服を乗船後、全て部屋のクローゼットに収納してあるので、着替えは扉を開けて選ぶだけですごく楽です。また大型船の為か?揺れは無く、眠っている間に移動している為、朝、目覚めてバルコニーからの景色は昨日とは異なる港なので、一瞬、部屋が移動した様な不思議な錯覚を覚えます。



ドレスコードのひと時

食事は、船内飲み放題パッケージ付きでしたのでビール、ワイン、ジュース、等、大満足でした。特にトマトジュースは(イタリア産のトマトの絞りたて!)格別でした。朝、昼は洋食を中心としたbuffetスタイルのレストラン18,19階にあり見晴らしも素敵でした。台湾からの若い新婚夫婦と同じテーブルになり、日本語が話せる方だったので話が弾みました。広い船内なのにその後も何度か彼らとすれ違いました。

buffeteに隣接してプールエリアにあるその場で作るピッツアやハンバーグ、ホットドックコーナーも夜遅くまで無料でしたので、ナイトショーの後、少しお腹が空いたのでビールと一緒にいただきました。

夕食はメインレストラン(8階、ヘキサゴン)で、毎日、食事時間とテーブルが指定され変更することは出来ませんが、メニュー変わって豪華な料理で楽しみました。



左上: レストラン(朝食)、右上: 日の出を見ながらの朝食、左下: エレベーターホール、右下: エレベーター内部 行き先表示パネル

終日クルージングの日は、多数の船内アクティビティに迷います。海を見ながらのフィットネス、ヨガ、エアロビクス、バターゴルフ、ゲームマシン、卓球、ジャグジー、プール、ウォータースライダー等、とても時間が足りません。特に人気があるのは、「ザ・スパイラル」で、なんと高さ74メートル! 洋上で最長の滑り台を使ってデッキ20からデッキ8まで軽快に滑りおります。なめらかな曲線を描きチューブ状のスライドで安全なのですが、途中、真っ暗になる部分もありスリルがありました。衣服を着用した状態ですが下半身を黒いクロスで包んで滑るので、痛めることはありませんでした。友人の奥さんは、中国人の女性と卓球の組み合わせになり、突然「日中卓球競技?」好ゲーム展開となり敗戦に終わりましたが、楽しんだようです。クルーズならではの出会いです。

初日のニースの市場で買った水着を着てプールを楽しみました。50センチ隣の足を組んだパルジェヌは、よく見

るとお腹が飛び出た60代のおばさまでした。こんなこともクルーズならではの経験です。プールは足の届かない深い部分もありました。



左: 海を見ながらフィットネス、右: 船上で卓球



左: ニースで買った水着! 右: ザ・スパイラル(74mの滑り台)

夜はメインシアターのワールドシアターを中心に、様々なテーマのナイトショーがありました。アクロバット、ダンス、ライブ音楽、特殊効果を組み合わせた革新的な迫力あるエンターテイメントを楽しみました。出演者の熱気が伝わってきました。特にマジックは、動画で録画しましたが、理解不可能でした。

船尾に位置する美しいパノラマ・ラウンジでは、音楽をテーマにした体験ができ、ショーの前のドリンクを飲みながら、ユニークなデザインが空間を変えるインタラクティブ・フロア、夜のテーマを反映して切り替わるスクリーンを楽しみました。



左: パノラマラウンジ、右: メインシアターのナイトショー

9日目(バルセロナ入港、世界遺産「サグラダファミリア、サン・パウ病院」見学)。サグラダファミリアは、以前にも(15年前)訪れましたが、その頃とは随分工事が進んでいました。着工から100年以上も経過しており、ガウディ没後100周年の今年、高さ172.5mあるメインタワー「イエス・キリストの塔」が完成し2030年代の完成を目指している計画らしいです。

東側と西側の異なる色彩のステンドグラスが、太陽の動きとともに内部の壁と床に反射し一刻と鮮やかに変化する光景がたまりません。



左上: サグラダファミリア、右上: ステンドグラスの内部、下: エアロビクス体験

10日目(マルセイユに入港、下船。ニースからドバイ乗継ぎ帰国の途へ)。



この体験記を書いているとき、テレビでは2026年の正月休暇を利用して海外旅行に行かれた方々の帰国インタビューが放送されていました。

円安の影響で滞在中のレストランでの食費が信じられないくらい高額だったようです(パスタ小皿が3000円・・・)。私の場合は、毎日食べ放題の為、気がついたら3.9kgも増えてました。せっかく海外に行くのなら日本では味わえない料理をいっぱい食べたいものです。円安時こそ食費の心配のいらないクルーズをお勧めします。

今回の地中海のクルーズは、入港する国がヨーロッパでカジュアル船の為、日本人が少なかったです。多かったのはフランス、イタリアの方で、小さい子ども連れの若い夫婦です。万一船内で迷っても、確実に部屋に戻れる様、子どもの腕には番号の記入したシールが取り付けられていました。彼らは、食べ放題の船内生活を楽しんでいるようでした。下船を嫌がって泣いている子どもも見かけました。日本国内のクルーズ船の乗客は高齢者夫婦が多いと聞きます。もっと若い夫婦、発育期の子どもたちが行きやすい環境になればと思いました。